

# 広報あしや

'75  
No.22

小学校3年生～中学校3年生用



「未来の芦屋」精道小学校 4年 久保岳夫くんの作品

■ これからの芦屋

■ 埋立地にはどんなまちが…

■ 芦屋と文学



# これからの 芦屋



**芦**屋市は、緑豊かな美しい自然の風物に恵まれています。この特性を生かして、まちの中に、木・草花、鳥などをふやし、まちを緑で包む“全市公園化”——自然の中のまち——づくりをしていきます。

**緑**のペールに包まれた中で、市民が豊かな生活と文化を楽しむことができようように、芦屋でなければできない施設をつくり、住みよいまちづくりをしていきます。

## ●都市機能の充実した住みよいまち●

### ●自然と調和した緑豊かな

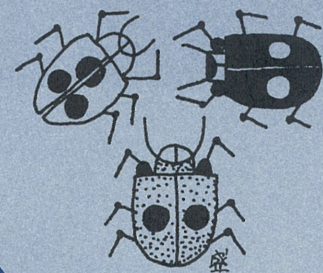


### 美しいまち●

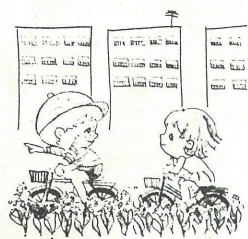
### ●豊かな人間性と文化を

### はぐくむ健康なまち●

**す**ぐれた自然環境と人工環境のもとで、ひとりひとりの市民がおたがいに協力し、まちを愛し、さらに市民自らが住みよいまちをつくりあげようとする気持ちをもって、香り豊かな文化を創造することができる、清潔で健康なまちづくりをしていきます。



昭和46年に、市では将来のまちづくりのものとなる「基本構想」をつくり、市議会の議決を受けました。昭和60年を目標としたこの構想をもとにして、いろいろな具体的な計画がたてられ、現在、その計画にしたがって、計画の実現に近づける努力を つづけています。こうして、芦屋は、恵まれた自然の美と、建物などの人工の美、さらに、みんなが協力して、となりの人を愛し、まちを愛する人間の美が調和した、すてきな住宅都市をつくらうとしています。



♥芦屋市は、これからも住宅都市として、栄えていくのかなあ？

市のまちづくりの計画では、将来とも住宅都市として発展させていくと決めています。みんなでほんとうに住みよいまちにしていくため、力をあわせていくことがたいせつですね。



▶将来人口（昭和60年）10～12万人、面積18.71km<sup>2</sup>▶

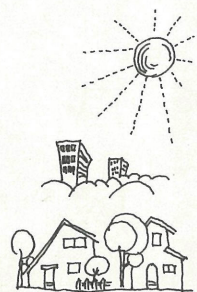


埋立地にはどんなまちが...

いま、芦屋浜には、ことしの3月に完成した「浜地区」と、52年に完成予定の「沖地区」の2つの埋立地があります。

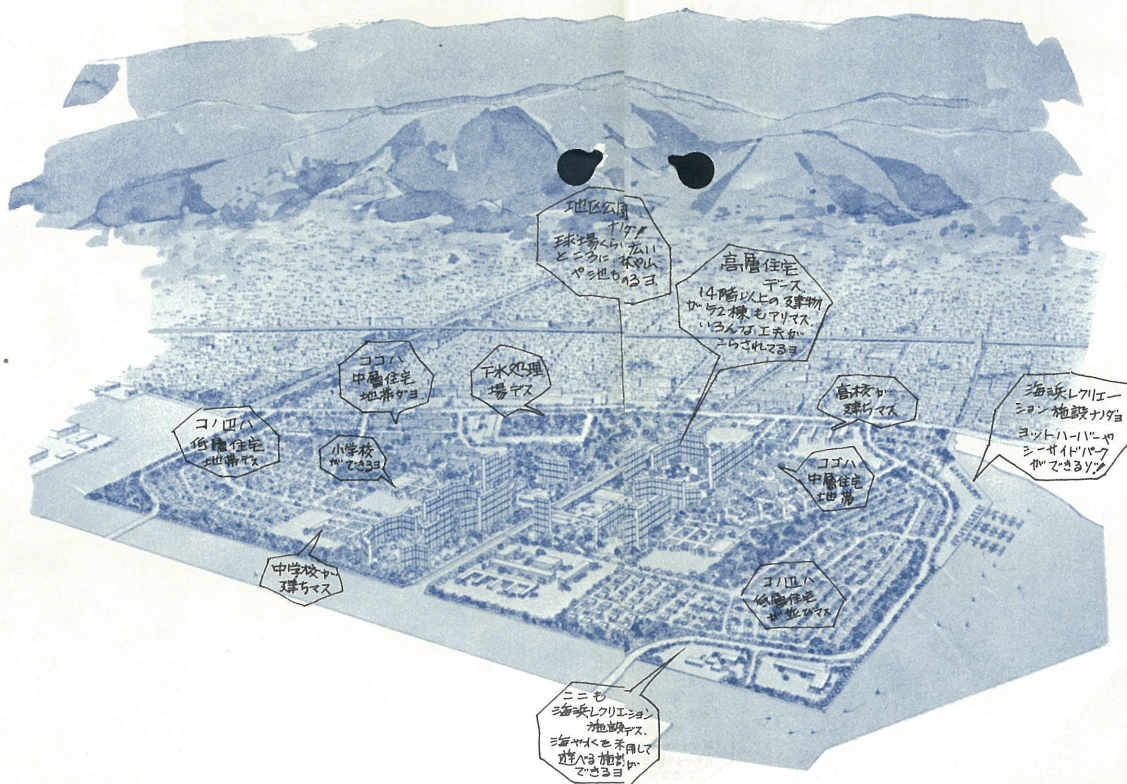
このうち「浜地区」は住宅地として、「沖地区」はレクリエーション施設として利用する計画になっています。このように海を埋めだてて住宅地にするのは、全国でもめずらしいことです。この「浜地区」は計画によると57年の春には人口約20,000人、住宅数約5,700戸のニュータウンとして誕生する予定になっています。

完成すれば、全面積のおよそ半分は住宅や教育のための敷地につかわれ、残りの半分が、公園・緑道・センターの施設・商店などにつかわれます。ひざしと木だちと浜風をふんだんにとり入れた住宅地として、おめみえするのともうまじかですね。



スケジュール

昭和50年	<ul style="list-style-type: none"> <li>埋立地の測量を始める</li> <li>地盤改良を始める</li> <li>高層住宅の工事始める</li> <li>道路もつくり始める</li> </ul>
昭和52年	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校ほか公共施設などをつくり始める</li> <li>商店などもつくる</li> <li>高層住宅の入居者募集</li> </ul>
昭和53年	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育、高層住宅、公共、商店、医療施設が完成、人が住みはじめる。</li> <li>中・低層住宅などの建設を始める。</li> </ul>
昭和57年	<ul style="list-style-type: none"> <li>全部の事業が完成する</li> </ul>



♥奥山には、これから先どんなまちができるのかな？

いまでも住宅がたくさん建っていて、人も多く住んでいます。10年後にはこの地区に約3000人くらいのひとびとが住むようになるだろうと、考えられています。

「全市公園化」は、山の自然、公園、緑道、家庭の庭の緑によって、点から線へ、線から面へと緑をひろげ、全市が公園的なイメージをもつまちをめざすものです。

緑のネットワーク

この考え方にたうて、大小さまざまな公園、芦屋川、宮川、江尻川、埋立地のなかの緑道、山のハイキングコースなどを結び、みなさんが安全に歩きまわれる「緑のネットワーク」を造ります。

埋立地のなかの緑道

公園、自転車道など

また公園

緑地帯や緑道をひろげ、自転車道など

発しない決めていきますし、大きな道路などには

をいっただいこのことしています。だから、山も開

ます。このまま放っておくと、たいへんことになるので、市では

「全市公園化」——自然のなかのまちづくり——を目標に、い

まある自然をまもりながら、もしもまちの中自然

これからの芦屋

みなさんも、そんなのとおり、芦屋は阪神工業地帯にはさまれています。この中であって、芦屋は六甲の山なみを後ろにして住宅地として発達し、緑の多い美しい景色をだいにしてきました。けれども、自動車の増加や、宅地の開発、道路の建設などによって、しだいにさわがしくなり、緑もへってき



♥ことしのように予算が少ないと、わたしたちのためになる仕事ができなくなるの。

ことしのように不景気で、税収入が入ってこないときは、どうしてもやっていかなければならないものに限ってお金を使うことになるでしょう。けれども、未来の芦屋をつくるための仕事は、完成が少し遅れることはあってもやっていかなければならないものだと、市では考えています。



# 芦屋と文学

そこは大阪と神戸とのあひだにある美しい海岸の別荘地で白砂青松といった明るい新開の別荘地であった。…街路は整頓され、洋風の建築は起こされ、郊外は四方に発展して到るところの山裾と海辺に、瀟洒な別荘や住宅が新緑の木立のなかに見い出された。

そしていま私の立っている芦屋川のほとりは、河原も道路も蒼田い月影を浴びて、真白に輝いていた。対岸の黒い松原蔭に、灯影がちりほり見えた。道路の傍には松の生ひ茂った崖が際限なく続いていた。そしてその裾に深い藪があった。月見草がさいてゐた。（蒼田い月、徳田秋声）

●これは徳田秋声（明治四年生れ）が大正九年に発表した、短篇小説「蒼田い月」の中にえがかれた芦屋の風景です。このほか、宇野浩二（明治二十四年生れ）が昭和二十八年に発表した「枯木のある風景」の中や、小出権重という画家の文章「めでたき風景」（昭和五年発行）にも、にたような風景がえがかれています。また、谷崎潤一郎（明治十九年生れ）の小説「細雪」（昭和十一年発表）でも芦屋が舞台になっているのは有名な話です。



▲芦屋浜（芦屋川河口）

## 芦屋裏山

吉沢 独陽

識りし知りしに  
来は来てみだに  
くるくるこぼるの  
赤い実が

古くは、万葉集の時代（五〜八世紀）から現代まで、「芦屋」はいろんな時代のいろいろな文学作品にあらわされてきました。むかしは、ホタルのとぶ、けしきのいい漁村で、都からはなれたひなびたところが、たいていこの歌をよむ人たちの心を動かしたようじゃ。

## 芦屋風景

柳沢 健

黄昏の海を見てみると、味の  
いい葡萄酒の匂ひがする。

ほしほしと

あふばかり

遠い昔の

おもいこ

雑木林の細道の

空の深さよせつなまよ

吉沢独陽 芦屋市に四十年

以上も住んでいた詩人です。

明治36年元日生れ。

明治以後になると、ほとんど交通も便利になり、住宅都市として発達したためか、そういった内容から、明るい豊かなまちとして、文学作品に登場するようになってきました。このわがりの芦屋は、どんなふうに人の心にしみのつじきつ。その、未来のイメージを書き加えていくのは、みんなの役目です。この時代になっても、魅力あるまち——そんな芦屋をいついてきたつもりです。ともあれ、多くの人の心に残った芦屋のひとかけらとして、芦屋にちなんだ文学作品の紹介をかきまわします。

黄昏の松原を見てみると、  
紫色の絹の匂ひがする。

黄金のちかちかする砂浜に身を横たえて  
薄るる雲と消えぬ帆を眺めながら  
私は独語する「この仄かに燃える日の匂ひ」

遠く四国の山が夕陽のなかに揺れる  
微風が海波をたたいて消える。  
音もなく滑るヨットには暗紫のボンネッ。T。

誰かが幽かに海上で話す声がする。

ヨットの上げかやいせもつと遠くもつと遠くへ。  
夕陽が青く煙っている波のはるかかなたに。

黄昏の海を見てみると  
黄金の人魚の唄がきこえる  
黄昏の松原をみている  
長い髪の毛を解く音がする。

柳沢 健 大正八年から十二年の五年間、芦屋にいた詩人です。二木露風と詩の雑誌「未来」をだしました。



▲城山（芦屋裏山）入口近く



いさざり火の昔の光ほの見えて  
あしやのさとごとく螢かな

撰政大臣(新古今)

はるる夜の星方河辺の螢かも  
わが住む方のあまのたく火か

在原業平(新古今)

はるかなるあしやの沖のつきねにも  
夢路は近き都なりけり

藤原俊成(新勅撰)

芦の屋に螢やまがふあまやたへ  
思ひも恋も夜は燃えつつ

藤原定家(續後撰)

いつもかく寂しき物か津の国の  
芦屋の里の秋の夕暮れ

藤原家隆(玉上集)

- 撰政大臣：藤原長経のこと。鎌倉時代の歌人。
- 在原業平：平安時代の歌人。阿保親王の子。美男子で歌の名手。伊勢物語の作者といわれている。
- 藤原俊成：平安時代の歌人。定家の父。歌は新古今集ほか勅撰集に四百首以上も残っている。
- 藤原定家：鎌倉時代の歌人。はなやかにたくみな

### ● 作者紹介 ●

- 歌をよむ人として有名。多くの歌論書も残している。
- 藤原家隆：鎌倉時代の歌人。すなおに気持ちをあらわす歌い方で有名。
- 河東碧梧桐：明治生れの俳人。大正八年～九年の間、むずめの病気をなおすため芦屋に住んだ。
- 高浜年尾：明治生れの俳人。高浜虚子の子。いま

- も芦屋に住み、雑誌「ホトギス」を発行。
- 山口誓子：明治生れの俳人。大正十二年から病気をなおすため芦屋に住んだことがある。いまは西宮。
- 富田碎花：明治生れの歌人。詩人。大正十年ころから、いまにいたるまで芦屋に住み、活やく中。
- 与謝野鉄幹：詩人。歌人。雑誌「明星」の発行に

- 力をそそいだ。この歌と詠子の歌は、市内の友人の招きで二人が芦屋に来たときのもの。
- 与謝野詠子：歌人。「明星」で活やく。大だんで情熱的な歌をつくる人として有名。
- 早野台気：明治に生れ、長く芦屋に住んだ歌人。新しい短歌をつくりつけた。

髪が臭ふそれだけを言つて蠅打つてやる

河東碧梧桐

六甲は雪といひ妻朝戸く

高浜年尾

夜を帰る枯野や北斗鉾立ちに

山口誓子

開森の潮見さくららの名のみにて  
海こそ見ゆれ咲く花もな

富田碎花

黒き雲しばしば月を過へるのみ  
逢ふ人もなし磯の十二時

与謝野鉄幹

浪速の灯和田の岬の灯もわれも  
見る海人どもの夜半のはたらき

与謝野詠子

屋根屋根二ハルサメケムリ鬱然ト  
アシヤノ空間身が押シナラフ

早野台気

●万葉集は、日本でもっとも古い歌集だといわれています。この中に、処女塚の伝説の歌が六首と、漢人の浜の歌が一首あります。

●万葉集のほかにも、新古今和歌集をはじめ千載和歌集、後拾遺和歌集ほか、とても多くのいろいろな歌集に、「芦屋」をよんだものがあります。

●これらをよんでみると、おかしな人がどんな気持ちで「芦屋」を考えていたのが、伝わってくるようです。いちど、先生といっしょに、話しあってみるといいですね。